

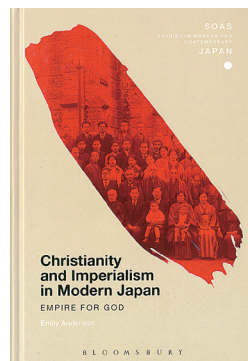
エミリー・アンダーソン著

『近代日本におけるキリスト教と帝国主義——神のための帝国』

Emily Anderson, *Christianity and Imperialism in Modern Japan: Empire for God.*

Bloomsbury Academic, 2014

松谷基和



本書は明治期から一九四五年の日本敗戦時に至るまでの期間、当時の日本の代表的なキリスト教徒たちが、キリスト教と帝国主義の関係をどのように位置付け、また大日本帝国の政府や社会に對してキリスト教の存在意義を示すためにどのような言論活動や実践活動を行ったかについて丹念に追跡し検討した労作である。

本書の骨格をなすキリスト教と帝国主義の関係性というテーマは、既存の日本キリスト教史研究においてもしばしば取り扱われてきたテーマであり、決して新しいものではない。しかしながら、既存研究の多くが、キリスト教は帝国主義とは本質的に相容れないとの価値判断を自明の前提として、特定の時代や事件におけるキリスト教徒の反応を取り上げ、それが本来あるべきキリスト教の姿からどの程度逸脱していたかを批判するという傾向を強く

持っていたのに対し、本書はそうした倫理主義的アプローチからは距離を置き、日本のキリスト教と帝国主義の関係性が、その時代ごとの政治的、社会的、または思想的な課題とどのように結び付きながら形成され、また発展していったのかについて冷静に考察し、当時のキリスト教徒にとつてキリスト教と帝国主義は必ずしも矛盾する関係になく、むしろキリスト教信仰のゆえに積極的に帝国主義を支持する側面があつたことを明らかにしている。また、考察の対象時期を明治期から昭和の敗戦までの長期間に設定し、分析の対象となる地理的範囲も、日本本土から朝鮮半島や中国大陸、さらに米国西海岸の日系人コミュニティにまで広がっている。これほどの視野の広さは、既存研究には類を見ない点であり、本書の優れた特色と言える。

ただし、本書が分析の対象としている「キリスト教」とは、実際には「日本組合基督教会」（以下、「組合教会」）を指しており、カトリック教会は言うまでもなく、他の主要なプロテスタント教派である日本基督教会やメソジスト教会は考察の対象から外されている。また、組合教会を代表する人物として取り上げられたのは、海老名弾正や柏木義円を始めとする有力な牧師や信徒数名であり、果たして彼らが近代日本のキリスト教を代表していたかについては議論の余地がある。いずれにしても、本書は組合教会という特定の教派に重点を置いた著作であり、そのタイトルにある「キリスト教」はかなり限定されたものである点に読者は予め留意する必要がある。

以下ではまず各章の内容を順に整理して紹介し、最後に本書の意義と課題を論じることにした。

序章では本書の研究上の目的と意義が丁寧に説明される。上述した日本キリスト教研究史上の意義に加えて、本書が「帝国と宗教」という普遍的なテーマを意識した事例研究であることも強調される。

第一章は、キリスト教と帝国主義の関係を考える導入口として、いわゆる「不敬事件」を契機として展開されたキリスト教徒の明治国家への忠誠をめぐる論争が紹介される。そして、この論争を経てもキリスト教徒の間に統一見解が生み出されず、問題が未解

決のまま後の時代に持ち越されたことが、後の朝鮮伝道（本書の第四章）を始めとする帝国の外地における伝道の目的や方法をめぐる組合教会内の対立に繋がっていったことが示唆される。

第二章では、日露戦争の是非をめぐって展開されたキリスト教徒間の論争が紹介される。ここでは組合教会内の戦争肯定論者である海老名弾正と、否定論者の柏木義円の言説が比較して論じられる。さらにこれらの論客の分析に留まらず、日露戦争を否定する柏木が、実際に日露戦争で戦死したキリスト教徒に対してどのような対応を採ったのかという実践に係る問題にも検討がなされる。

第三章は、海老名弾正とその弟子筋にあたる千葉豊治が唱道した米日系人移民への伝道を分析する。ここでは、それまで日本国内では普遍性や超国家性を主張する信仰ゆえに国体に反すると批判されてきたキリスト教を、逆にその普遍性や超国家性を活かして日本という国家を離れた海外移民に伝道し、彼らの道德的資質を向上させることで、帝国への貢献を果たそうとした海老名らの姿が描かれる。

第四章では、前章で検討された伝道を通じた海外日系人の教化という発想の延長線上に、組合教会が展開した朝鮮人伝道が取り上げられる。ここでは、朝鮮人を日本支配に従順な存在に教化する手段として伝道を推進した渡瀬常吉と、それを終始一貫厳しく

批判し続けた柏木義円の論理と行動が比較して論じられる。そして、この帝国への貢献を強調する政治的要求の入り混じった伝道が、朝鮮総督府からの支援を受けて短期的には一定の成果を収めたものの、一九一九年の三・一独立運動により最終的に頓挫した経緯が述べられる。この辺りの解釈と叙述は先行研究と大きく異なるところはないが、渡瀬が行った朝鮮の地方への伝道旅行の様子を詳しく分析したり、組合教会に加入した朝鮮人側の論理（欧米宣教師との確執）を紹介したり、また、渡瀬以外の組合教会宣教師である高橋鷹蔵と栗原陽太郎を取り上げ、渡瀬との相違点（例えば、高橋は朝鮮語を学び朝鮮服を着て伝道していた）にも論及したりするなど、組合協会の朝鮮伝道の全体像をバランス良く描いた点は、既存研究には見られない特色であり、注目に値する。

第五章では、三・一独立運動で朝鮮伝道が頓挫した後、組合教会が新たな活動の場を求めて中国大陸に進出して行く過程が描かれる。具体的には、朝鮮伝道を推進した組合教会関係者が関与した呂運亨（三・一独立運動後に上海に設立された大韓民国臨時政府の要人であり、キリスト教的な背景を持っていた人物）への懐柔工作や奉天の組合教会による在満朝鮮人伝道が取り上げられる。また、米国で日系人伝道に係った人物（第三章）がこの時期に中国に渡り、こうした一連の伝道や工作活動に係っていた事実も明らかにされ、組合教会の海外伝道推進者たちの人的ネットワークの広がりが見

される。

第六章では、日本本土に視点が戻され、一九二〇年代から盛んになっていた農村伝道と帝国主義との関係性が論じられる。そこで組合教会関係者の代表として分析されるのが、同じ群馬県で活動していた柏木義円と平栗原陽太郎である。彼らは両者とも朝鮮伝道に関与し（第四章）、その帝国に対するスタンスは異なっていたものの、キリスト教を通じた日本の農村の更生という点では共通の関心を持ち、海外の思想潮流、例えば、トルストイ主義、社会主義、デンマークの国民学校（キリスト教理念に基づく農業教育を重視した）の存在などに刺激を受けつつ、農村の福音化に尽力していた。ただし、柏木が一貫して帝国への貢献という欲望とは無縁であったのに対し、栗原は農村問題の解決こそが帝国への貢献となると見ており、この発想が次章で見える満蒙開拓の動きと連動していったことが示唆される。

第七章では、一九三〇年代以降、満蒙への開拓移民送出という国策に乗じて日本のプロテスタント諸派が協力して推進した満州国におけるキリスト教開拓村の問題が論じられる。この開拓村建設は、一九二〇年代から農村伝道に係ってきた賀川豊彦や栗原陽太郎らクリスチャンの力を結集し、さらに満州国のクリスチャン官吏である星野直樹や武藤富男なども協力して推進された一大プロジェクトであった。著者はその展開過程を追いながら、それが

一九四五年八月のソ連侵攻により悲惨な形で消滅したことで、明治以来、国策協力を通じて帝国内におけるキリスト教の存在意義を主張してきた組合教会の試みが最終的に挫折したと結論する。

著者が本書を通じて紹介した史実や議論の内容は、日本における先行研究と重なる部分も多く、著者もこれらの研究に負う部分が多いことを緒言や注釈で明示している。しかし、著者はこれらの先行研究を踏まえた上で、新たな資料発掘にも力を入れ、先行研究が見落としてきた組合教会の在米日系人伝道や国内の農村伝道に着目し、こうした活動も帝国主義との有機的連関性を持つていた事実を明らかにすることで、組合教会の海外伝道の目的や特徴を一段と明瞭に示しつつ、さらに世界史や日本帝国史といったより広い文脈からその意義を捉えなおすことに成功している。そして、それは同時に、キリスト教と帝国の狭間で、あるいは神とシーザーの間で、自己アイデンティティーの確立に苦しんだ日本のキリスト教徒の紆余曲折の物語としても高い完成度を示している。

他方で、こうした物語の一貫性を維持するためには、分析対象や資料に関して一定の絞り込みが行われた点は否めない。例えば、近代日本のキリスト教と帝国の関係性を探求するならば、その対象を組合教会に限定する必然性はなく、仮に重視するにしても他教派への一定の目配りは必要であったと思われる。著者は組合教

会を取り上げた主な理由として、他教派に比して最も帝国との問題との関与が深かったことを挙げているが、逆に言えば相対的に帝国への関与が低かった教派はどのような神学的、あるいは政治的、社会的背景からそのような対応となったのかが重要であり、そうした他教派の異なった反応を見ることで初めて近代日本のキリスト教内部の多様性や帝国との関係性の全体像を描くことができると思われる。また、組合教会が帝国の海外膨張に併せて海外にも伝道領域を広げていき、これが最終的に満州国の滅亡で終焉を迎えたという本書の物語の筋書きにおいて、最初の植民地である台湾領有時の組合教会の反応に全く言及がないのは画竜点睛を欠く感がある。組合教会の帝国への関心が明治以来、首尾一貫していたとすれば、台湾伝道こそが試金石であったはずであり、実際に台湾伝道がなされなかったとしても、なんらかの議論があったのかについて言及が必要であったと思われる。とはいえ、こうした限界点も含めて本書の提示する物語は日本や東アジアのキリスト教史や帝国史に関心を寄せる読者には刺激的であり、ぜひとも邦訳が望まれる。